

# 付加詞の前置と wh 島の効果

---

前 田 満

---

## 1. 序論

間接疑問文からの抜き出し (extraction) の容認可能性は、それに関わる wh 句自体の本質的特性により大きく左右される。(1)の対比が示すように、動詞の補部 (complement) を wh 島 (wh-island) から抜き出すことは周辺の許されているのに対し、付加詞 (adjunct) の抜きだしは完全に不可能である。この意味において、wh 島は、「弱い島」と呼ばれている。

- (1) a. ? Which problem do you wonder how to solve t  
 b. \* How do you wonder which problem to solve t

(Rizzi (1990: 73))

(1)の対比は、抜き出しの現象に広く見られる、いわゆる「補部と付加詞の非対称性」を示す事例である。これまでの研究では、この対比を説明するために、2つの分析が提案されている。Chomsky (1986)を筆頭とする近年の多くの研究は、この wh 島の効果が基本的には境界理論 (bounding theory) から導かれると主張している。代案として、この効果を Rizzi (1990)の提案する相対的最小性 (Relativized Minimality) の効果だけから導くという可能性も指摘されている (Cinque 1990)。本稿は、後者の接近法が妥当であると主張する。この目的を達成するために、本稿では、以前の研究においてあまり注目されていなかった付加詞の「単純前置」 (simple preposing) という現象に注目する。

本稿は、次のように構成されている。まず、第2節では、wh 島の効果に対する Chomsky (1986)の説明を概観した後、その問題点を提示する。次に、第3節

では、wh 島の効果が相対的最小性から導かれることを主張する。以上の議論で大きな役割を果たすのは、単純前置された付加詞が wh 島を越えて移動するという事実である。これは、本稿の分析の論拠となるばかりでなく、潜在的な問題ともなる。この問題については、第 4 節で取り上げる。また第 5 節は本稿の結論である。

## 2. 境界理論による説明

Chomsky (1986)は、(1)に見た補部と付加詞の非対称性が基本的には両者の空範ちゅう原理 (ECP) を満たす方法の違いにより説明できると主張している。この原理は、非代名詞的空範ちゅうが(2)のいずれかの方法により、適性統率 (properly govern) されねばならないことを定める。

(2)  $\alpha$  properly governs  $\beta$  iff  $\alpha$   $\theta$ -governs  $\beta$  or antecedent-governs  $\beta$ .  
(Chomsky (1986:17))

(3)  $\alpha$  governs  $\beta$  iff  $\alpha$  m-commands  $\beta$  and every barrier for  $\beta$  dominates  $\alpha$ .<sup>1</sup>  
(Ibid.: 7)

(4)  $\alpha$   $\theta$ -governs  $\beta$  iff  $\alpha$  is a zero-level category that  $\theta$ -marks  $\beta$ , and  $\alpha, \beta$  are sisters.  
(Ibid.: 19)

(5) Antecedent government holds of a link  $(\alpha, \beta)$  of a chain, where  $\alpha$  governs  $\beta$ .  
(Ibid.: 17)

以上の概念を念頭に置いて、(1)の対比を考える。まず、(1a)では、抜き出された which problem の痕跡は、埋め込み節の動詞 say により  $\theta$  統率 ( $\theta$ -govern) されており、それだけで ECP を満たしている。他方、(1b) の how の痕跡は、付加詞であるため、 $\theta$  統率されることはない。このため、付加詞の痕跡が ECP を満たすためには、先行詞統率 (antecedent government) による認可が要求される。

より具体的に見てみると、(1a, b)の派生はそれぞれ、(6a, b)のようになる。<sup>2</sup>

(6) a. which problem<sub>1</sub> do you wonder [<sub>CP</sub> how<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> PRO to solve t<sub>1</sub> t<sub>2</sub>]]

b. how<sub>2</sub> do you remember [<sub>CP</sub> which problem<sub>1</sub> [<sub>IP</sub> PRO to solve t<sub>1</sub> t<sub>2</sub>]]

いずれの構造でも、wh 句が埋め込み節の CP 指定辞を埋めており、この位置をさらなる抜き出しの脱出口 (escape hatch) として利用することは物理的に不可能である。このため、(7)に示す障壁 (barrier) の定義のもとではこれらの埋め込み節 (CP) が障壁となる。

(7)  $\gamma$  is a barrier for  $\beta$  iff (a) or (b) :

a.  $\gamma$  immediately dominates  $\delta$ ,  $\delta$  a BC for  $\beta$ .

b.  $\gamma$  is a BC for  $\beta$ ,  $\gamma \neq IP$ .

(8)  $\gamma$  is a BC for  $\beta$  iff  $\gamma$  is not L-marked and  $\gamma$  dominates  $\beta$ .

((7)–(8) : *ibid.* : 14)

すると、まず、(8)の定義により、L 標示されていない埋め込み節の IP が阻止範ちゅう (blocking category, BC) となる。IP は、欠陥的 (defective) 範ちゅうであるため、BC とはなっても固有障壁とはならないと仮定する (cf. Chomsky 1986: 15)。しかし、(7a) により、BC となる IP を支配する CP がその障壁性 (barrierhood) を継承して障壁となる。したがって、(6)のように CP 指定辞が満たされた埋め込み節からの抜き出しは必ず 1 つの障壁を越える結果になる。

上述のように、(6a) の t<sub>1</sub> は、 $\theta$  統率により、すでに ECP を満たしている。(1a) のような文の周辺的な位置付けに関しては、独立に下接の条件 (Subjacency Condition) から導かれると考える。以下の定義は、Chomsky (1986) の定義をいくぶん単純化したものである。

(9)  $\beta$  is subjacent to  $\alpha$  iff there are fewer than two barriers for  $\beta$  that exclude  $\alpha$ .  
(Cinque (1990: 21))

ここで、(6a) の which problem の移動は、1 つの障壁を越えているだけであるため、少なくとも下接の条件は満たしている。なお、Chomsky (1986: 36) は、この移動が障壁を 1 つ越えているために周辺的な位置付けを与えられると仮定している。

これに対し、(6b) の t<sub>2</sub> が先行詞統率により ECP を満たさねばならないことはすでに述べた。しかし、障壁の概念に基づく統率の定義 (cf. (3)) のもとで

は、(6b)の how<sub>2</sub> は、継承障壁となる CP を越えて t<sub>2</sub> を先行詞統率することはできない。このため、問題となる t<sub>2</sub> は、ECP に違反する。これにより、wh 島からの付加詞の抜き出しが完全に不可能であることも説明できる。このように、Chomsky (1986) の分析は、正しく(1)の対比を予測できる。

しかし、(10)のような(1)とは逆の「補部と付加詞の非対称性」を示す対比が存在することにも留意せねばならない。

(10) a. After the party, I wonder who will stay t (Kroch (1989: 67))

b. \*These books I don't remember where I bought t

(Contreras (1991: 67))

(10a) において意図されているのは、文頭の付加詞が埋め込み節と関連づけられる読みである。本稿は、話題化文と同様に、この場合にも、文頭の付加詞が埋め込み節の内部から移動されていると考える。なお、この移動を付加詞の「単純前置」と呼ぶ。<sup>3</sup> この考えが正しければ、付加詞の単純前置も、他の移動のように、島の制約に従うはずである。

では、この予測を、別の「弱い島」に関する事実により確かめる。例えば、叙実動詞の補文や外置された文主語の内部から付加詞を文頭に単純前置することはできない。<sup>4</sup>

(11) a. Under the bridge they believe that she met him

b. ?\* Under the bridge they forget that she met him

(Hegarty (1990: 105))

(12) a. On Tuesday, I think that he left

b. \*On Tuesday, it is obvious that he left

((a): Lasnik & Saito (1984: 260))

このような島に関しては、(1b) と (10a) の間に見たような wh 移動と単純前置の間の非対称性は存在しない。(11)―(12)の (b) の例は、(13)―(14)とほぼ同じ文法性を示す。

(13) ?\* When did they forget that she met him t (Hegarty (1990: 104))

(14) \* How is it time for John to fix the car t (Chomsky (1986: 33))

本稿では、これらの文の抜き出しの起こっている埋め込み節が障壁となると仮

定する。<sup>5</sup>このように、付加詞の単純前置も他の島の制約に従うという事実は、この構文が移動により派生されたということを示唆している。したがって、例えば、(10a)の付加詞は、埋め込み節の内部に生成され、wh 島を越えて文頭に移動されたと考えねばならない。また、付加詞の単純前置も移動現象の1例だとすれば、この操作により基底の位置に痕跡が残されると考えられる。<sup>6</sup>

以上の結論を念頭において、(10)に示した対比を考える。(10a,b)の派生は、それぞれ、(15a,b)のようになる。

(15) a. after the party<sub>i</sub> I wonder [<sub>CP</sub> who<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>2</sub> will stay t<sub>1</sub>]]

b. these books<sub>i</sub> I don't remember [<sub>CP</sub> where<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> I bought t<sub>1</sub> t<sub>2</sub>]]

(7)–(8)の定義を再び(15)に適用すると、(6)の場合と同様に、埋め込み節のCPが障壁となる。まず、(15a)のt<sub>1</sub>は付加詞の痕跡であるため、(6b)のt<sub>2</sub>の場合と同様に、先行詞統率によりECPを満たさねばならない。しかし、(15a)の埋め込み節のCPが障壁になるとすれば、この場合もt<sub>1</sub>はECPに違反してしまうことになる。この予測は、明らかに(10a)に示す文法性と調和しない。したがって、問題となる(10)の対比は、以上に概観したChomsky (1986)の提案するwh島の説明に対し重大な疑問を投げ掛けるものである。

この結論が正しければ、(15a)の埋め込み節のCPを障壁と考えることはできない。さもないと、(10a)の文は、(13)、(14)、(1b)と同様に排除されてしまうことになるが、この予測は、経験的事実に照らして妥当でないと思われる。以上の議論により、wh島の効果を境界理論から導く試みが正しくないという結論が得られる。次節では、相対的最小性に基づいた代案を見ることにする。

### 3. 相対的最小性による分析

Rizzi (1990) は、Chomsky (1986) の提案する最小性条件 (Minimality Condition) を修正し、(16)–(17)に示す相対的最小性を提案している。

(16) Relativized Minimality: X  $\alpha$ -governs Y if there is no Z such that

(i) Z is a typical potential  $\alpha$ -governor for Y,

(ii) Z c-commands Y and does not c-command X.

- (17) Z is a typical potential antecedent governor for Y, Y in an  $\bar{A}$ -chain  
 $=Z$  is an  $\bar{A}$ -specifier c-commanding Y. (Ibid.: 7)

(16)の定義によれば、 $\bar{A}$ 位置の先行詞はより局所的な $\bar{A}$ 指定辞( $\bar{A}$ -specifier)を越えてその痕跡を先行詞統率することはできない。この定義を(6a)に適用する。(6b)を以下に繰り返す。

- (6) b. how<sub>2</sub> do you wonder [<sub>CP</sub> which problem<sub>1</sub> [<sub>IP</sub> PRO to solve t<sub>1</sub> t<sub>2</sub> ]]

(6b)では、最も局所的な $\bar{A}$ 指定辞(CP指定辞)を満たしている which problem<sub>1</sub>がt<sub>2</sub>に対する典型的潜在的先行詞統率詞(typical potential antecedent governor)となる。すると、(17)の定義により、how<sub>2</sub>はt<sub>2</sub>を先行詞統率できないことになり、この分析でも、(6b)のt<sub>2</sub>がECPに違反することが予測できる。このように、相対的最小性を用いれば、(1b)が非文となることを、障壁の概念を用いなくともECPから導くことが可能となる。

しかし、Rizzi (1990) 自身も認めているように、(16)のように定義される相対的最小性だけではwh島の効果の全てを説明することはできない。具体的には、相対的最小性は(1a)のように、wh島から補部を抜き出した例が周辺の位置付けを持つことを予測できないのである。これは、Rizzi (1990) では、相対的最小性が統率に対する制約だと考えられているためである。本稿は、Cinque (1990) に従って、(1b)の周辺性は、相対的最小性とは独立の要因により生ずると考える。興味深いのは、wh島の場合に限らず、CP指定辞のwh演算子を越える移動は何らかの理由のために容認度が落ちるという事実である。本稿では、便宜上、この効果を「演算子の効果」と呼び、(18)のような形状の $\bar{A}$ 連鎖に対して働くものとする。

- (18) wh<sub>1</sub> … wh<sub>2</sub> … t<sub>1</sub>, where wh<sub>2</sub> is in the Spec of CP

ただし現段階では、この効果が実際に核文法(core grammar)の原理から導かれるか否かは明らかではない。しかし、この仮定を支持するいくつかの経験的な事実が実際に存在する。

まず、複合名詞句(complex NP)からの抜き出しについて考える。(19)の対比を考える。

- (19) a. ?? Who did you see [<sub>NP</sub> a rumor [<sub>CP</sub> that Mary saw t]]

b. \* Who did you visit [<sub>NP</sub> a man [<sub>CP</sub> that saw t ]]

(Johnson (1985: 73))

よく知られているように、名詞の補文からの抜き出しは、関係節からの抜き出しよりも容認性が高く、(19a)と(19b)の文の間には有意味な文法性の差がある。しかし、いずれの場合にも、少なくとも最も深く埋め込まれたCPが固有障壁になる。この仮定が正しければ、(19)の対比を境界理論のみから導くことは容易ではない。ここで、両者の間の興味深い違いは、後者の文の関係節のCP指定辞に空演算子 (null operator) または削除されたwh句があるという点である。すると、例えば、(19b)のより正確な構造は(20)であると考ええる。

(20) who<sub>i</sub> did you visit [<sub>NP</sub> a man [<sub>CP</sub> wh<sub>2</sub> that [<sub>IP</sub> t<sub>2</sub> saw t<sub>1</sub>]]]

wh島の場合と同様に、(20)のwho<sub>i</sub>はCP指定辞の空演算子wh<sub>2</sub>を越えて抜き出されており、このために(19b)の方がより文法性が低くなると考えることができる。換言すれば、(20)の派生では、下接の条件の違反に加えて、「演算子の効果」が働いており、この分だけ(19b)の方が文法性が落ちると考えるのである。

次に、LFにおけるwh島からの抜き出しについて考える。問題となるのは、(21)のような多重疑問文 (multiple question) である。

(21) who remembers where Mary bought what

伝統的に、(21)のような文は、whatの作用域に関して曖昧であると考えられてきた (Baker 1970; Chomsky 1981)。それは、whatが埋め込み節を作用域にとる解釈に加えて、主節を作用域にとる解釈が存在するからである。後者の場合のLF表示は(22)である。

(22) [<sub>CP</sub> who<sub>1</sub> what<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>1</sub> remembers [<sub>CP</sub> where<sub>3</sub> [<sub>IP</sub> Mary bought t<sub>2</sub> t<sub>3</sub>]]]]]

しかし、Nishigauchi (1990: 38) は、多くの話者にとって、(22)のように、(21)のwhatが広い作用域をとる読みは周辺のであると述べている (cf. Kuno & Robinson 1972; Hankamer 1974: 73; Nishigauchi 1991: 229)。

これが正しければ、(21)のような文の曖昧性は文献で広く観察されているほど明瞭なものでないことになる。(22)の表示の周辺性は、(6a)の表示が周辺ので

あるのに対応しているように思われる。しかし、(22)の表示の周辺性は、下接の条件が LF 移動には関与しないとする Huang (1982) 等の見解が正しければ、境界理論からは導けない。むしろ、(22)の表示で問題となるのは、what の LF 移動が埋め込み節の CP 指定辞の wh 句を越えており、結果として(18)の形式の  $\bar{A}$  連鎖が生じているためだと考えられる。すると、多重疑問文における作用域の特性も「演算子の効果」の存在を示唆している。

最後に、(23)と(24)の間の対比について考える。

(23) a. \*This book, to whom should we give t

b. \*John, who do you think saw t

(Chomsky (1977: 94))

(24) a. On Tuesday, what will you buy t

b. After the party, who will stay t

(Kroch (1989: 66-67))

(11)が適格であるので、(24)でも、話題の移動それ自体がその文法性の理由とは考えられない。いずれの例でも、前置された要素は、CP 指定辞の wh 句の左に現われている。したがって、このような要素が CP に付加されていると考えることができる。これが正しければ、例えば、(23a) と (24a) の構造は、それぞれ (25a, b) である。<sup>7</sup>

(25) a. [<sub>CP</sub> this book<sub>1</sub> [<sub>CP</sub> to whom<sub>2</sub> should [<sub>IP</sub> we gave t<sub>1</sub> t<sub>2</sub>]]]

b. [<sub>CP</sub> on Tuesday<sub>1</sub> [<sub>CP</sub> what<sub>2</sub> will [<sub>IP</sub> you buy t<sub>2</sub> t<sub>1</sub>]]]

まず、(25a) の表示をしてみる。この場合には L 表示されない IP が BC となる。しかし、これを支配する CP 節点は、障壁とはならない。なぜなら、Chomsky (1986) によれば、ある最大投射は、それに付加された要素を排除しないからである。すると、この場合、this book<sub>1</sub> は t<sub>1</sub> に 0 下接していることになる。(25b) の場合にも、同じことが言える。したがって、(23)-(24)の対比を境界理論により説明することはできない。これが正しければ、(23)でも、目的語の話題化により形成された  $\bar{A}$  連鎖が(18)の形状となるために「演算子の効果」が働くと考えることができる。<sup>8</sup>

以上の議論を要約すると、(1a)の文の周辺性は、(18)のような形状の  $\bar{A}$  連鎖に



対して働く「演算子の効果」により説明でき)。これが正しければ、wh島の効果の核心部分を境界理論ではなく相対的最小性から導くことが可能となる。<sup>9</sup>

ここで問題となるのは、(10a)のような付加詞の単純前置の例が相対的最小性の効果を示さないという事実である。この節で示した分析が正しければ、付加詞をwh島から抜き出すと、wh移動であれ単純前置であれ、その痕跡はECPに違反することになる。しかし、これは事実と調和しない。さらに、Kroch (1989)は、(10a)のような例は(1a)、のような例よりも文法性が高いと判断している。この判断によれば、(1a)と(10a)の間にも若干ながら対比が存在することになる。こうした事実は、(10a)のような付加詞の前置が「演算子の効果」にも従わないことを示唆している。このように、(10a)の事実は本稿の分析に対しても問題を生ずることになる。次節では、このなぜ付加詞の単純前置に相対的最小性の効果が見られないかという問題に対する可能な解決策を提案する。

#### 4. 付加詞の単純前置と相対的最小性

この節では、(10a)のような付加詞の前置がなぜ相対的最小性に従わないかという問題を考察する。この問題を解決する基も単純な仮定は、相対的最小性が適用される表示のレベルにおいて、(10a)の文が $\bar{A}$ 連鎖を含んでいないと考えるものであろう。代案としては、(10a)を排除しないように、相対的最小性の適用範囲を縮小するという可能性がある。以下の議論では、前者の接近法を擁護する。

いずれの仮定をとるにせよ、この問題を解決する鍵となるのは、付加詞の単純前置により作り出される $\bar{A}$ 依存関係の性質であるように思われる。一見したところ、この付加詞の前置は、話題化に類似している。両者の間の興味深い違いは、Rizzi (1990)も指摘するように、前置された要素が演算子として解釈されるか否かという点である。換言すれば、移動の結果作り出された $\bar{A}$ 依存関係が演算子と変項の関係を含むか否かという点において両者は異なっている。話題化に関していえば、話題(topic)は、ある種の演算子と解釈されると考えられている。この点は、話題化の痕跡が寄生的空所(parasitic gap)を認可するな

どの特性を示すこと等により経験的に裏付けられている。これに対し、付加詞の単純前置は、このような演算子と変項の関係を作り出さないと考えられている。<sup>10</sup>この意味において、付加詞の前置を「意味的に空虚な  $\bar{A}$  移動」と見做すことができる。<sup>11</sup>換言すれば、付加詞の単純前置は、話題化と異なり、より文体的 (stylistic) 色彩が強い移動操作なのである。

Rizzi (1990) は、この特性に注目し、相対的最小性をさらに相対化することにより、(10a) が相対的最小性に従わないことの説明を試みている。具体的には、演算子により満たされている  $\bar{A}$  指定辞は、問題となる  $\bar{A}$  依存関係それ自体が演算子と変項の関係を含む場合に限り相対的最小性の効果を引き起こすと考ええる。すると、介在する演算子は付加詞の前置により作り出された  $\bar{A}$  連鎖にはなんら影響を与えないことになる。すると、(15a) の after the party<sub>1</sub> は t<sub>1</sub> を先行詞統率できることになる。

(15) a. after the party<sub>1</sub> I wonder [<sub>CP</sub> who<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>2</sub> will stay t<sub>1</sub>]]

しかし、これは、(10a) の文法性を予測できるとはいえ、相対的最小性が広く  $\bar{A}$  依存関係に対する制約であるとする本稿の主張に照らすと、望ましくない仮定である。

本稿の基本的な方針は、上述のように、相対的最小性が適用される表示のレベルにおいて、(10a) のような文が  $\bar{A}$  連鎖を含まないと仮定することである。ECP が LF において適用されるとすれば (cf. Chomsky 1981)、相対的最小性は、このレベルにおいて、空範ちゅうの認可に関して重要な役割を果たす。これが正しければ、(10a) の文は、少なくとも、このレベルにおいて  $\bar{A}$  連鎖を含まなければよいのである。さもなければ、(10a) の付加詞の痕跡は、(1a) の場合と同じように、ECP に違反してしまうことになる。

Baltin (1986) は、基本的にこの方針に従い、(10a) のような単純前置された付加詞は痕跡を残さなくてよいと仮定している。この仮定に従えば、(10a) の LF 表示は、(15a) ではなく (26) となる。

(26) after the party I wonder [<sub>CP</sub> who<sub>1</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>1</sub> will stay ]]

この表示には、前置された付加詞の痕跡が存在しない。したがって、(15a) の場合と異なり、この場合には ECP 違反は起こらず、相対的最小性は関与しな

い。また、(26)には、そもそも  $\bar{A}$  連鎖が存在しないために、「演算子の効果」も存在しないことが正しく予測できる。しかし、(26)のような表示を考えると、前置された付加詞は、誤って主節の解釈だけを持つことが予測されてしまう。換言すれば、移動された要素が痕跡を通じてのみ基底の位置と関連づけられるとすれば、文頭に前置された付加詞は、埋め込み節とは関連づけられず、意図された解釈が得られない。しかし、実際に埋め込み節の解釈も存在することを考えれば、この予測は誤っている。したがって、この分析もまた充分なものとは言えない。

これに対して、本稿は、付加詞の単純前置も、他の  $\bar{A}$  移動の事例と同様に、痕跡を残すという立場をとる。したがって、(15a) が正しい (10a) の S 構造であると仮定する。しかし、以上に述べた理由により、(15a) は、(10a) の LF 表示であってはならない。さもなければ、LF において、(15a) の  $t_1$  は、ECP に違反することになってしまうからである。この問題を解決するために、本稿は、前置された付加詞が LF において痕跡の位置に再構築 (reconstruction) されると考える。この本稿の提案は、 $\bar{A}$  移動された要素が演算子と解釈されない場合には、その痕跡の位置に再構築しようとする Saito (1989) の見解に基づいている。<sup>12</sup>これが正しければ、この再構築により、(15a) から (27) が派生される。

(27)  $t_1$  I wonder [<sub>CP</sub> who<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>2</sub> will stay *after the party*<sub>1</sub>]]

(27) に示すように、この再構築により、文頭の付加詞は基底の位置に戻される。しかし、この移動は下方移動となるため、(27) のままでは、 $t_1$  が ECP に違反してしまう。しかし、この痕跡は、LF の意味解釈において何の役割も果たしていないと考えられる。したがって、解釈を持たない痕跡の削除が可能だとすれば (cf. Lasnik & Saito 1984)、 $t_1$  の削除により (27) の表示を ECP 違反から救うことができる。すると、(27) の表示から  $t_1$  が削除されて (28) になる。

(28) I wonder [<sub>CP</sub> who<sub>1</sub> [<sub>IP</sub> t<sub>1</sub> will stay *after the party*]]

この場合も、*after the party* の痕跡自体が存在しないため、(26) の場合と同様に、相対的最小性は全く関与しない。また、この表示には、 $\bar{A}$  連鎖も存在しないため、「演算子の効果」も働かない。このようにして、この分析でも、(10a) が完全に適格文であることが説明できる。さらに、(26) では、どのように節の境

界を越えて前置された付加詞が埋め込み節の読みを得られるかという点が問題となった。これに対し、本稿の仮定する(28)の LF 表示が正しければ、このような問題はそもそも生じてこない。つまり、このレベルでは、問題となる当の付加詞が埋め込み節の内部に戻されているからである。

また、この分析は、以上に述べた話題化と付加詞の単純前置の間の意味解釈上の違いをも説明できる。付加詞の単純前置は、話題化のように演算子と変項の関係を作り出さない。換言すれば、この操作は、LF において、意味解釈上重要な役割を果たしていないということである。この事実は、(28)のように、前置された付加詞が基底の位置に戻されると考えれば説明がつく。つまり、(29a, b) は、全く同じ LF 表示(28)を持ち、LF においては、同じ意味解釈が与えられる。

(29) a. I wonder who will stay after the party.

b. After the party, I wonder who will stay.

この仮定により、付加詞の単純前置が文体的な特性を持つ側面が説明できる。

最後に、なぜ演算子と解釈されない要素だけが再構築されうるかという問題について簡単に考察する。<sup>12</sup> 普遍文法には、(30)のような趣旨の原理が存在すると考えられている。

(30) Every quantifier (operator) occupies an  $\bar{A}$ -position (non-argument position) at LF.

(Pesetsky (1987: 100))

これが正しければ、wh 句のような演算子は基底の位置に再構築できない。なぜなら、もし再構築が起ると、その演算子は LF において A 位置を占めることになり、(30)の原理に違反することになるからである。しかし、単純前置された付加詞は演算子とは解釈されないため、この制約はこの付加詞の再構築を妨げないのである。

## 5. 結論

本稿は、主に (10a) のような付加詞の単純前置の事実に基づき、wh 島の効

果が境界理論でなく、相対的最小性から導かれうることを示した。また、下接の条件により説明されていた(1a)のような文の周辺性も、相対的最小性や境界原理とは独立の「演算子の効果」により説明を試みた。また、なぜ付加詞の単純前置が相対的最小性の効果や「演算子の効果」を受けないかという問題に対しては、文頭に前置された付加詞がLFにおいて再構築されると主張した。この仮定の基礎となるのは、付加詞の単純前置が演算子と変項の関係を作り出さない文体的な規則であるという観察であった。<sup>13</sup>

### 注

1. 支配(domination)と排除(exclusion)の定義については、Chomsky (1986: 7-9)を見よ。L 標示については、Chomsky (1986: 15)を見よ。
2. (6)は、Chomsky (1986)の仮定しているものに比べるといくぶん単純な表示である。Chomsky (1986)は、(1a)が(i)のようなS構造表示を持つと仮定している。

(i) which problem<sub>i</sub> do you [<sub>VP</sub> t'<sub>1</sub> [<sub>VP</sub> wonder [<sub>CP</sub> how<sub>2</sub> [<sub>IP</sub> PRO to [<sub>VP</sub> t'<sub>1</sub> [VP solve t<sub>1</sub> t<sub>2</sub>]]]]]]]

この分析によれば、which problem は連続循環的な付加操作により文頭に移動する。このようなVP付加が必要であるのは、VPが固有障壁となると仮定されているためである。この点は本稿の議論に直接関与しないため、以下の議論でも便宜上、(6)のような単純化した表示を用いることにする。

3. 本稿は、話題化文が話題自体の $\bar{A}$ 移動により派生され则认为する。また、Baltin (1982)やLasnik & Saito (1992)に従い、話題がIPに付加され则认为する。これに対し、Chomsky (1977)は、話題化文の派生がwh移動を含んでいると主張している。これによれば、話題は文頭の位置に基底生成され、補助的なwh移動により意図された解釈を得る。この仮定は、話題化文の派生がwh移動と同じ制約に従うという観察に基づいている。しかし、これらの特性はみな $\bar{A}$ 移動の示す一般的な特性とも考えられる。また、本稿は、Baltin (1982)及びLasnik & Saito (1992)などの行なっているこの分析に対する反論が説得力のあるもの则认为する。例えば、話題化は、埋め込み節でも適用可

能である。

- (i) The inspector explained that each part he examined very carefully.  
(Hooper & Thompson (1973: 474))

Chomsky (1977) の分析では、話題は、CP の外部に基底生成されるため、埋め込み節の話題は補文標識 (complementizer) の左側に現われるはずである。しかし、実際には、埋め込み節の話題は必ず補文標識の右側に現われる。

本稿は、単純前置される付加詞も、話題と同じ位置に移動され则认为する。

4. (12b) の文法性の判断は私の調査によるものである。多くの話者は、(12b) のような文が (12a) や (10a) よりも文法性が低いと判断した。
5. これらの弱い島の性質については、本稿では、深入りしないことにする。Chomsky (1986: 33) は、(12a) のような外置された文主語が固有障壁になると仮定している。叙実動詞の補文が障壁になるという主張については、例えば、Cinque (1990: 30) 等を参照。
6. 本稿は、帰無仮説として、移動が義務的に痕跡を残すと考える。
7. Chomsky (1986) の枠組みでは、このような CP に対する付加を禁ずる制約は存在しない。なぜなら、この CP は項ではなく主節であるからである。
8. この場合には、「演算子の効果」が他の事例よりもかなり強く働いているように思われるが、この理由はよくわからない。この事実と関連しているのは、(1b) と (10b) の対比である。Contreras (1991: 67) は、wh 島からの話題化は、対応する wh 移動の場合に比べてかなり文法性が低いと述べている。この場合にも、なぜそのようになるかはよくわからない。
9. 本稿は、「演算子の効果」を  $\bar{A}$  連鎖の解釈に関わる制約だと考える。例えば、(18) の形状において、介在する wh 演算子が何らかの解釈の曖昧性を生ずると考えることができるかもしれない。 $\bar{A}$  連鎖の解釈が LF で行なわれるとすれば、「演算子の効果」は、この表示に対して働くものと考えねばならない。
10. この点に関しては、Rizzi (1990: 105) の議論を参照。
11. これは、もともと Saito (1989) が日本語のかき混ぜ規則 (scrambling) に対して用いた用語である。

12. Barss (1984, 1986) 及び Saito (1989) は、wh 句や話題が再構築されないことを示唆する説得力のある論拠を挙げている。詳細な議論に関しては、上掲の参考文献を参照。
13. 本稿は、(6)のような場合に、埋め込み節 (CP) が継承による障壁にならないと主張した。このため、(7a)の定義をいくぶん修正する必要がある。本稿は、(7a) を(i)のように修正する。
- (i)  $\gamma$  immediately dominates  $\delta$ ,  $\delta$  a BC for  $\beta$ , and is not L-marked.
- この定義は、障壁性の継承がそれ自体 L 標示されていない最大投射の場合にのみ起こると考える点において(7a)と異なる。また、主語や付加詞の島のように、障壁性の継承が問題となる他の場合には、継承により障壁となるのはいずれも IP である。したがって、この場合には、継承による障壁となる最大投射は L 標示されていない。

### 参考文献

- Baker, C. L. (1970) "Notes on the Description of English Questions: The Role of an Abstract Question Morpheme," *Foundations of Language* 6, 197-219.
- Baltin, M. R. (1982) "A Landing Site Theory of Movement Rules," *Linguistic Inquiry* 13, 1-38.
- Baltin, M. R. (1986) "Adverb Preposing and Extraction Constraints," ms., New York University.
- Baltin, M. R. & A. S. Kroch (eds.) (1989) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Barss, A. (1984) *Chain Binding*, ms., MIT.
- Barss, A. (1986) *Chains and Anaphoric Dependence*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, N. (1977) "Oh Wh-movement," in P. Culicover, T. Wasow, & A. Akmajian, eds., *Formal Syntax*, Academic Press, New York, 71-132.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications,

Dordrecht.

- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Cinque, G. (1990) *Types of  $\bar{A}$ -dependencies*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, H. (1991) "On the Position of Subjects," in S. D. Rothstein, ed., *Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure: Heads and Licensing*, Academic Press, New York, 63-79.
- Hankamer, (1974) "On Wh-Indexing," *NELS* 5, 61-76.
- Hegarty, M. (1990) "On Adjunct Extraction from Complements." in L. L. S. Cheng & H. Demirdash, eds., *MIT Working Papers in Linguistics 13: Papers on Wh-Movement*, 101-24.
- Hooper, J. B. & S. A. Thompson (1973) "On the Applicability of Root Transformations," *Linguistic Inquiry* 4, 465-97.
- Huang, C.-T. (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Johnson, K. B. (1985) *A Case for Movement*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Massachusetts.
- Kroch, A. S. (1989) "Asymmetries in Long-Distance Extraction in a Tree-Adjoining Grammar," in M. R. Baltin & A. S. Kroch, eds., 66-98.
- Kuno, S. & J. Robinson (1972) "Multiple WH Questions," *Linguistic Inquiry* 4, 463-88.
- Lasnik, H. & M. Saito (1984) "On the Notion of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-89.
- Lasnik, H. & M. Saito (1992) *Move Alpha: Conditions on its Application and Output*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Nishigauchi, T. (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Nishigauchi, T. (1991) "Construing WH," in C.-T. Huang & R. May, eds., *Logical Structure and Linguistic Structure: Cross-Linguistic Perspectives*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 197-231.



- Pesetsky, D. (1987) "WH-in-Situ: Movement and Unselective Binding," in E. J. Reuland and A. Meulen, eds., *The Representation of (In)definiteness*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts, 98-129.
- Rizzi, R. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Saito, M. (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous  $\bar{A}$ -movement," in M. R. Baltin & A. S. Kroch, eds., 182-200.

### Synopsis

#### Preposing of Adjuncts and the *wh*-Island effect

By Mitsuru Maeda

It has been claimed that the extractability of an element from *wh*-islands depends on its intrinsic properties. Wh-movement of an object out of *wh*-island is marginally permitted, while that of an adjunct is generally impossible. In this sense, *wh*-islands may be referred to as weak islands, as distinct from strong islands, such as subjects or adjunct clauses. It has been widely claimed that the weak island effect of embedded questions should be explained by Bounding Theory. Chomsky (1986) follows these lines, and proposes an account for the effect in terms of the notion of barrier. In particular, embedded questions constitute certain barriers. Recently, however, an alternative account is put forth by Cinque (1990), who argues that the weak island effect is entirely derivable from the notion of Relativized Minimality without recourse to Bounding Theory. The aim of this paper is to defend the latter position. To achieve this, we cast light on the behavior of simply preposed adjuncts with respect to the extraction from within *wh*-islands, where the term "simple preposing" is intended to mean  $\bar{A}$  movement of non-operators: movement of such adjuncts is typically exempt from the weak island effect of embedded questions. This fact is unpredictable under Chomsky's (1986) account, since it is predicted under the view

that adjuncts cannot be extracted from *wh*-islands, whether the movement involved is *wh*- movement or simple preposing. Thus, it forms an argument against Chomsky's account. However, although this fact motivates our claim in this paper, it also constitutes a potential problem at the same time: Relativized Minimality also excludes extraction of an adjunct from *wh*-islands, as it stands. We attempt to solve this problem by arguing that simply preposed adjuncts, but not those that are *wh*-moved, may be reconstructed (or undone) into its D-structure position at LF. This assumption is based on the observation that simple preposing of an adjunct, unlike *wh*-movement of an adjunct, does not necessarily establish a semantically significant operator-variable relation. This amounts to saying that simple preposing of an adjunct may be merely "stylistic" in the relevant sense. If simply preposed adjuncts are reconstructed into its base position at LF, they do not have any significant semantic import.